奄美大島における新たなツーリズムの展開
―スポーツ合宿によるしまおこし―

須山　聡

Ⅰ　はじめに

奄美大島にはアテネオリンピック金メダリストの野口みずきや，シドニーオリンピック銀メダリストのエリック・ワイナイナをはじめ，多くのアスリートやチームが合宿に訪れる。奄美大島でのスポーツ合宿は1990年代に始まったが，一過性ものにとどまらず，10数年を経過して地域に定着した観がある。冬の奄美大島では，多くの選手らが一般道路を走る姿が，もはや見慣れた風景となっている。それを見守る住民の視線は穏やかで自然である。

陸上競技をはじめとするスポーツには，競技場などの施設が不可欠であるが，施設さえ整備されれば競技や練習ができるわけではない。奄美大島には，陸上競技をはじめとするスポーツ合宿に適した条件があると考えられる[1)]。本論は，スポーツ合宿が奄美大島に定着する地域的な諸条件を解明することを目的とする（図1）。

スポーツの普及をインパクトとした地域形成の研究事例としては，中央日本のスキー

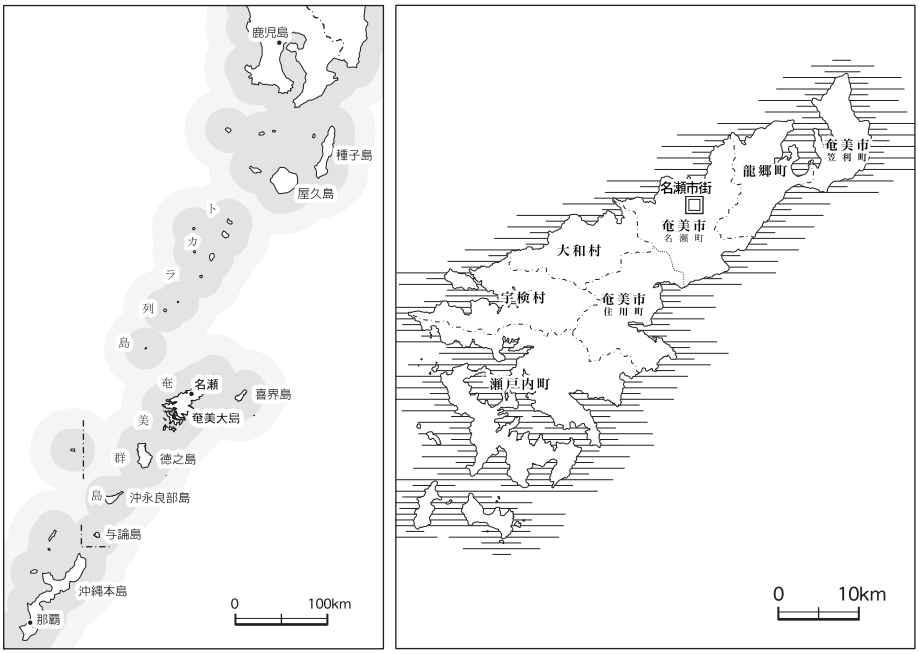


図1　研究対象地域

場集中地域を取り上げ「スキー集落」の形成を論じた研究があげられる（白坂 1986; 呉羽 1991）。スキー観光は学校や職場を単位とした団体でなされる場合が多く，これらの研究は団体客の存在を暗黙の前提としてきたと考えられる。この延長線上で，新藤ほか（2003）は長野県菅平高原におけるラグビーをはじめとするスポーツ合宿の受け入れにともなう土地利用変化を考察した。また井口ほか（2006）は，千葉県九十九里浜におけるテニス民宿の集積を分析し，テニス民宿地域が高校・大学などの一般プレイヤーの合宿を主な市場として成長してきたことを明らかにした。

日本における観光行動は団体旅行を基本としていた。受け入れるホスト側にとっては，まとまった入り込みを確保できる団体観光は効率がよかった。そのため高度経済成長期には，大量の収容能力を有する大型宿泊施設が全国の観光地に簇生した。しかし，1980年代以降は観光行動が個人や少人数のグループ主体に移行した。さらに1990年代以降はグリーンツーリズムやエコツーリズムといった新たな観光のスタイルが提示され，ホスト側には細分化され多様化した需要に応えることが求められた。

スポーツ合宿は，団体観光という意味では旧来の観光スタイルを踏襲する。しかしスポーツ合宿は，バスで団体が移動するような周遊型観光ではなく，1カ所にとどまる滞在型である。また滞在期間が長期間に及ぶ点も従来の団体観光とは異なる。スポーツ合宿で必要とされる資源は，第一に競技施設などのインフラストラクチュアである。一般的に観光にはアトラクションが不可欠であり，そのアトラクションには往々にして強度の演出が施される（橋本 1999）。わざとらしい迎合的なアトラクションを嫌うかにみえるグリーンツーリズムやエコツーリズムであっても，かえって「自然らしい」巧妙な演出には幻惑される。しかし，スポーツ合宿にはそのような演出や粉飾は必要ない。競技に直結する自然環境や練習環境がストレートに求められるだけである。既存の団体観光でも，新たなグリーンツーリズムでもない奄美大島のスポーツ合宿は，新たなツーリズムの拠点を形成する試みであるともいえよう。

Ⅱ　スポーツアイランド構想の経緯

奄美群島を観光地としてみた場合，観光行動の広域化にともない，競合する地域は沖縄のみならずハワイやグアムにまで拡大した。これらの先発・大規模観光地に比べ，奄美群島の宿泊施設やアトラクション施設は貧弱といわざるを得なかった。美しいサンゴ礁に縁取られた海は奄美群島最大の観光資源であるが，サンゴ礁があるだけでは沖縄や東南アジア・太平洋のリゾート観光地と何ら差別化を図ることはできない。事実，奄美群島は沖縄観光圏の一部に長らく位置づけられてきた。したがって，奄美群島が観光地としての個性を発揮するためには，先発観光地，とくに沖縄の模倣ではいけないことが，奄美の行政担当者や観光関係者には強く認識されていた。

奄美大島でスポーツ合宿が関心を集めるきっかけとなったのは，1992 年の東京直行便就航である。直行便就航による観光入り込み客の増加が期待され，奄美大島の地域的特徴を生かした観光誘致が旧名瀬市を中心に検討された。さまざまなアイディアのなかで，実業団や大学，およびプロスポーツ団体の合宿は，冬季の温暖な気候を活用し，奄美大島の自然条件を生かしたツーリズムとして注目された。スポーツ合宿ではまとまった人数の入り込みが期待でき，さらにトップアスリートが来島することにより奄美大島を宣伝することができる。これらの特徴が，先行する観光地，とくに沖縄と奄美群島を差別化すると考えられた。誘致対象をアスリートのなかでも実業団や大学チームに絞り，野球をはじめとするプロチームに特化した沖縄や九州本土とは異なる市場が指向された。

このような着想は，奄美群島と強い結びつきをもつ本土の有識者から提起されたものと推測される。スポーツ合宿の誘致と受け入れのため，旧名瀬市は 1996 年に「スポーツで癒す島」を標榜したスポーツアイランド構想を策定した。同構想は①トップアスリートが集うスポーツの島，②自由時間を楽しむスポーツの島，③奄美の自然を生かしたスポーツの島，④健やかな身体をはぐくむスポーツの島，の構築を目標としていた。したがって同構想は大学や企業に所属するトップアスリートのみならず，一般の人びとにも楽しめるスポーツ環境の整備を想定していたはずである。しかし，1996 年から本格化したスポーツアイランド事業は，実質的にスポーツ合宿の誘致と受け入れが核となった。

この策定作業において旧名瀬市は 2 人のアドバイザーを委嘱した[2)]。彼らは企業・大学スポーツ界に幅広い人脈を有し，スポーツ団体の潜在的なニーズをくみ上げて奄美につなぐ役割を果たした。スポーツアイランド構想がスポーツ合宿誘致とほぼ同義として認識されるようになった背景には，彼らが大学や企業スポーツ団体とつながっていたことも働いたと考えられる。同構想の基本計画書では，構想実現のため官民の協調体制が重視された。スポーツ合宿の受入団体として，1994 年には奄美スポーツキャンプ受入連絡協議会が発足した。同協議会は 1999 年に奄美スポーツアイランド協会に発展し現在に至っている[3)]。また旧名瀬市は 1997 年に，担当部署として産業振興部紬観光課内にスポーツアイランド係を設置した。

奄美スポーツアイランド協会の会員は奄美市産業振興部長（会長）および紬観光課長（事務局長）をはじめ，市職員が 4 人，宿泊施設代表者が 10 人，および観光物産協会から 1 人である。また，同協会の賛助会員 22 人中，奄美群島広域事務組合などの公共セクター職員は 8 人である。会員構成の上からは，同協会は民間主体で構成されているように見える。しかし，2008 年度予算約 300 万円のうち約 75％を奄美市からの支出金に依存している。すなわち，スポーツ合宿の受入団体である同協会は，産業振興政策の対象として行政が財政的に支援する存在である。

Ⅲ　合宿団体の入り込み

1．合宿団体数の推移

奄美大島へのスポーツ合宿の入り込みは，東京直行便が就航した 1992 年当時から見られた。この頃のスポーツ合宿誘致は，名瀬市街地に立地するホテルの個別の営業活動によるものであった。また，前述のスポーツアイランド構想のアドバイザーらが，実業団チームの監督に個人的に働きかけて合宿を誘致した例もある。スポーツ合宿の組織的な誘致活動は，1994 年に奄美スポーツキャンプ受入連絡協議会が発足してから本格化した。

1994 年におけるスポーツ合宿の入り込みは，54 組，835 人であったが，その後増加を続け，1997 年には 87 組，1,314 人に達した（図 2）。1999 年に入り込み人数は 907 人に減少したが，2006 年には過去最高の 1,586 人を記録した。

合宿地としての奄美大島の評価は陸上関係者の間に口コミで広がった。実業団・大学の監督やコーチは，出身校やかつての所属チームを紐帯として強く結びついている。彼らの閉鎖的ではあるが濃密なネットワークで情報が取り交わされるうちに，合宿地としての奄美大島の評価が形成された。

合宿団体は陸上競技，とくに長距離種目が中心である。マラソンや駅伝で好記録を出す有力選手や，彼らが所属するチームが奄美大島を合宿地とすることで，奄美大島は 1990 年代には選手強化およびレース前の調整の場として陸上競技関係者の間で知られるようになった。また，陸上競技以外では，野球と柔道で定期的な入り込みが見られる。全体に施設を要する屋内競技よりは，屋外競技の合宿が中心である。団体の種類別では実業団と大学が中心で，プロチームや高等学校の合宿は少数にとどまる。

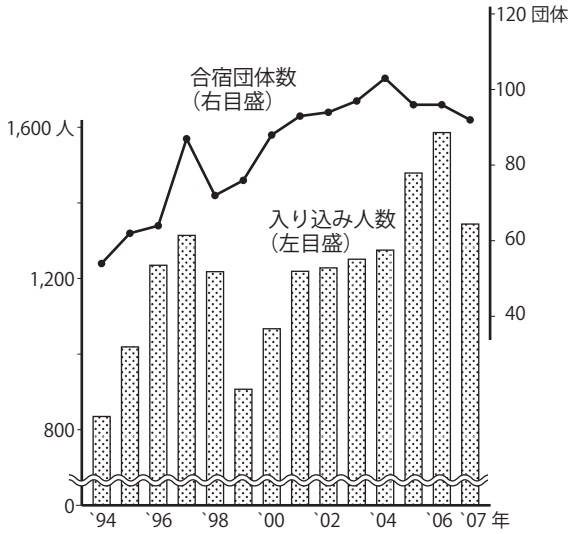
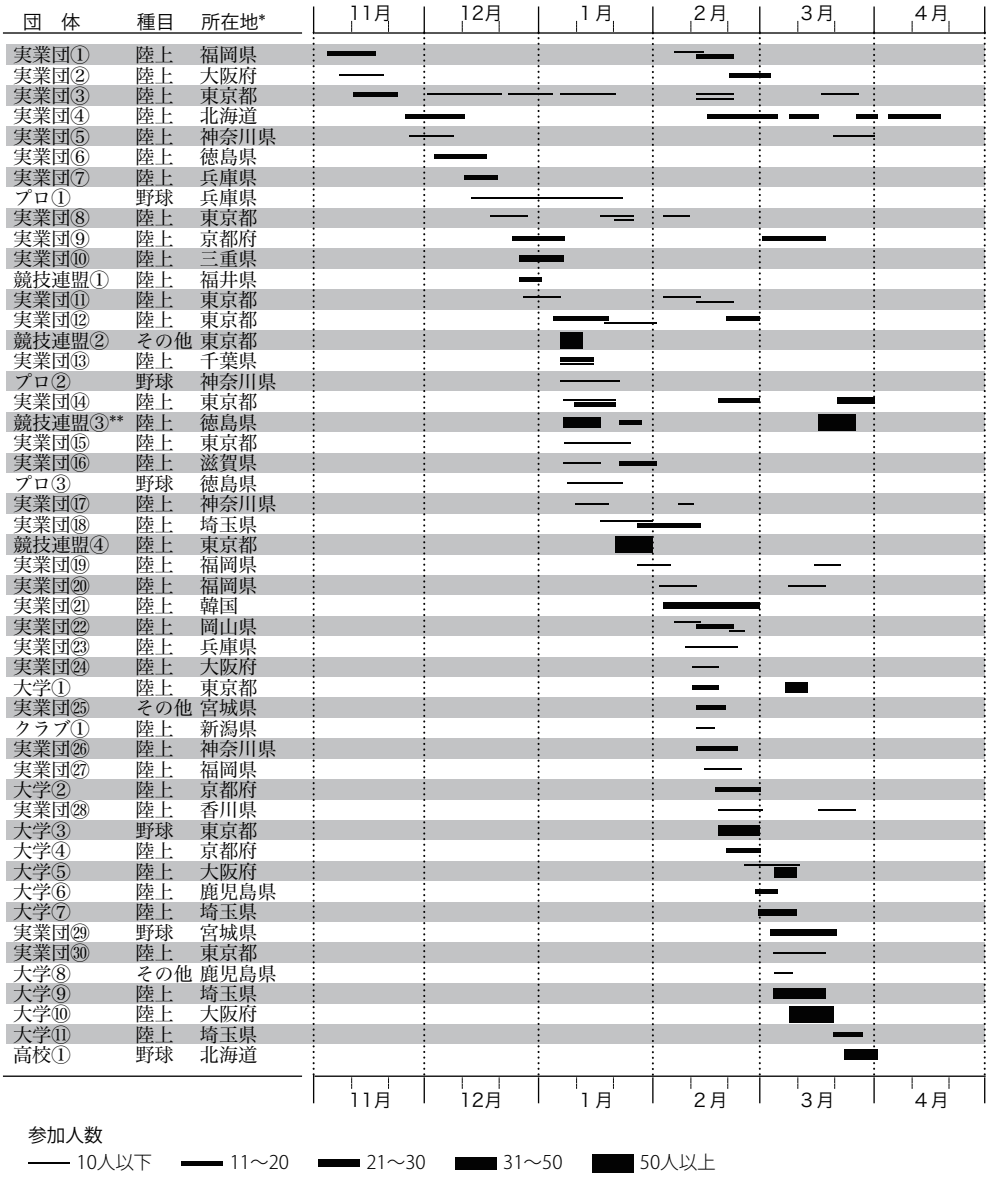


図 2　奄美大島におけるスポーツ合宿団体数の推移
（1994 ～ 2007 年度）
（奄美スポーツアイランド協会資料より作成）

2．入り込みの季節的パターン

奄美大島におけるスポーツ合宿の平均人数は 14.6 人であるが，平均宿泊数は 9.1 泊にのぼる。すなわち，スポーツ合宿は規模の面では小規模な団体旅行と同程度であるが、泊数が多い点で一般の団体観光客とは大きく異なる。また，長期滞在することにより，入り込みの少ない平日の



*　チームの合宿所または練習拠点を所在地とした。不明の場合は本社または事務局をチームの所在地とみなした。
**　競技連盟③は徳島県の企業が事務局を担当しているが，関西の実業団が加入している団体である。
***　これら以外に，高校の合宿がゴールデンウイークに１団体，７～８月に３団体あった。

図３　奄美大島におけるスポーツ合宿団体の入り込み（2007 年 11 月～ 2008 年４月）
（奄美スポーツアイランド協会資料より作成）

空室を埋める効果も期待できる。

奄美大島のスポーツ合宿は，おおむね 11 月から翌年 4 月までの 6 カ月間をシーズンとする。そのうち 1 ～ 3 月に入り込みが集中する。2007 年度には 92 組，1,344 人のスポーツ合宿が入り込んだが，高等学校の 4 組をのぞく 49 団体の 88 組，のべ 1,239 人が，2007 年 11 月から翌年 4 月に合宿を実施した（図 3）。

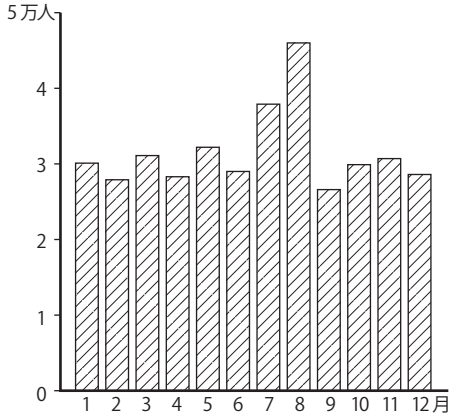


図4　奄美大島における月別入り込み客数（2008年）
（鹿児島県大島支庁『奄美群島の概況』より作成）

奄美大島の観光入り込み客数は，7～8月をのぞいて毎月3万人前後で推移している（図4）。奄美大島の観光シーズンはこの2カ月間に局限され，それ以外の期間は宿泊の受け入れに余裕がある。冬季に実施されるスポーツ合宿は，いわば観光のオフシーズンの空隙を充填する役割を果たすことが期待された。しかし，例えば2008年2月の総入り込み客数2万7,929人中，スポーツ合宿の入り込みはわずか1.1％の321人にとどまる。入り込み客数だけを考えるとスポーツ合宿誘致による直接的な効果は限定的である。

図3に示した期間中に入り込んだ49団体中，実業団が30，大学が11を占めた。また種目別では40団体が陸上競技で，他は野球が6，柔道・バドミントン・卓球が各1団体であった。奄美大島におけるスポーツ合宿が陸上競技に特化する傾向にあることが再確認できる。

1シーズンに奄美大島で複数回の合宿を繰り返す団体もある。実業団③は7回，実業団④は5回の合宿を奄美大島で実施している。両チームは有力なランナーを擁するチームである。奄美大島における連続的な合宿の実施は，これらのチームが奄美大島を選手強化の拠点ととらえていることの証左である。

実業団と大学チームでは，実業団が11～2月，大学が2～3月に入り込む傾向が見て取れる。実業団チームはアマチュアとはいえ，選手は実質的に競技に専念することができる。彼らは基礎強化やレースのための調整を第一に合宿日程を組む[4)]。国内の大きな大会は秋から冬にかけて集中するため，この時期にはレース前の調整が必要となる。また，温暖な奄美大島では，本土の厳寒期を避けて強化に取り組むことができる。2009年の元旦に開催された全日本実業団駅伝（ニューイヤー駅伝）の上位8チーム中7チームが奄美大島で合宿を行っていた。奄美大島はレース直前の調整の場として，そして有力チームの情報交換の場として認識されている。また，複数のチームが集合する競技連盟の合宿は，泊数こそ平均7.0泊と短期間であるものの，平均参加者数が41.2人に達する。

一方，大学チームが学期中に長期の合宿を実施することは困難である。そのため，大学の合宿は春休み期間中の2～3月に集中する。近年は大学チームの合宿が減少傾向にある。奄美市紬観光課の担当者は，この原因を就職活動の早期化にあると考えている。従来，大学4年生の春から始まった就職活動が，近年では3年生の秋頃に前倒しされる

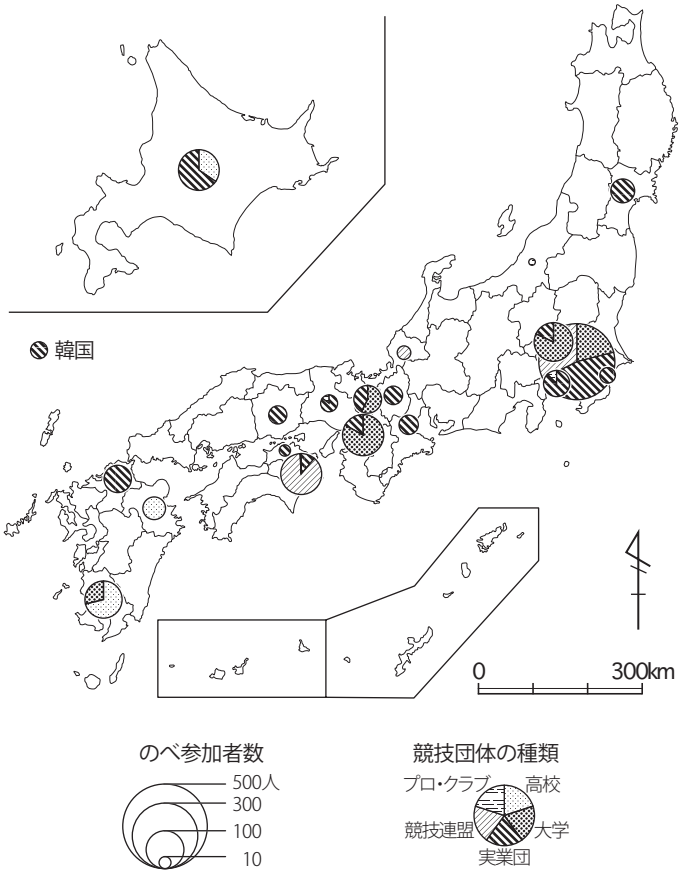


図 5　奄美大島でスポーツ合宿を行った団体の所在地
（2007 年 4 月～ 2008 年 4 月）
（奄美スポーツアイランド協会資料より作成）

傾向にある。そのため，合宿シーズンでもある 2 ～ 3 月が就職活動のピークとぶつかり合宿が困難になりつつあるという。合宿を実施する場合でも，大学に近接した地域が選定され，移動に不便な奄美大島に来るチームは減少気味である。

プロ競技の合宿は少数ではあるが，野球を中心にみられる。これらの合宿はいずれも選手個人が行ういわゆる「自主トレ」である。プロ野球の場合，チームのキャンプが 2 月 1 日から始まるため，自主トレは 12 ～ 1 月が中心である。プロ①は阪神タイガースの下柳剛投手，プロ②は横浜ベイスターズの村田修一選手らの合同自主トレである[5)]。村田選手は学生時代に奄美大島で合宿した経験があり，奄美大島に対する当時の好印象から，同僚の選手らとともに自主トレを続けている。

合宿チームの所在地は，関東地方と近畿地方に集中する（図 5）。奄美大島へは東京・大阪から直行便があり，これらのチームは奄美大島まで乗り継ぎなしで来ることができる。関東からは実業団が，関西からは大学チームが多く訪れる傾向にある。また，高等学校の合宿団体は九州のチームが主体である。このほか国外からは韓国の実業団チームが，

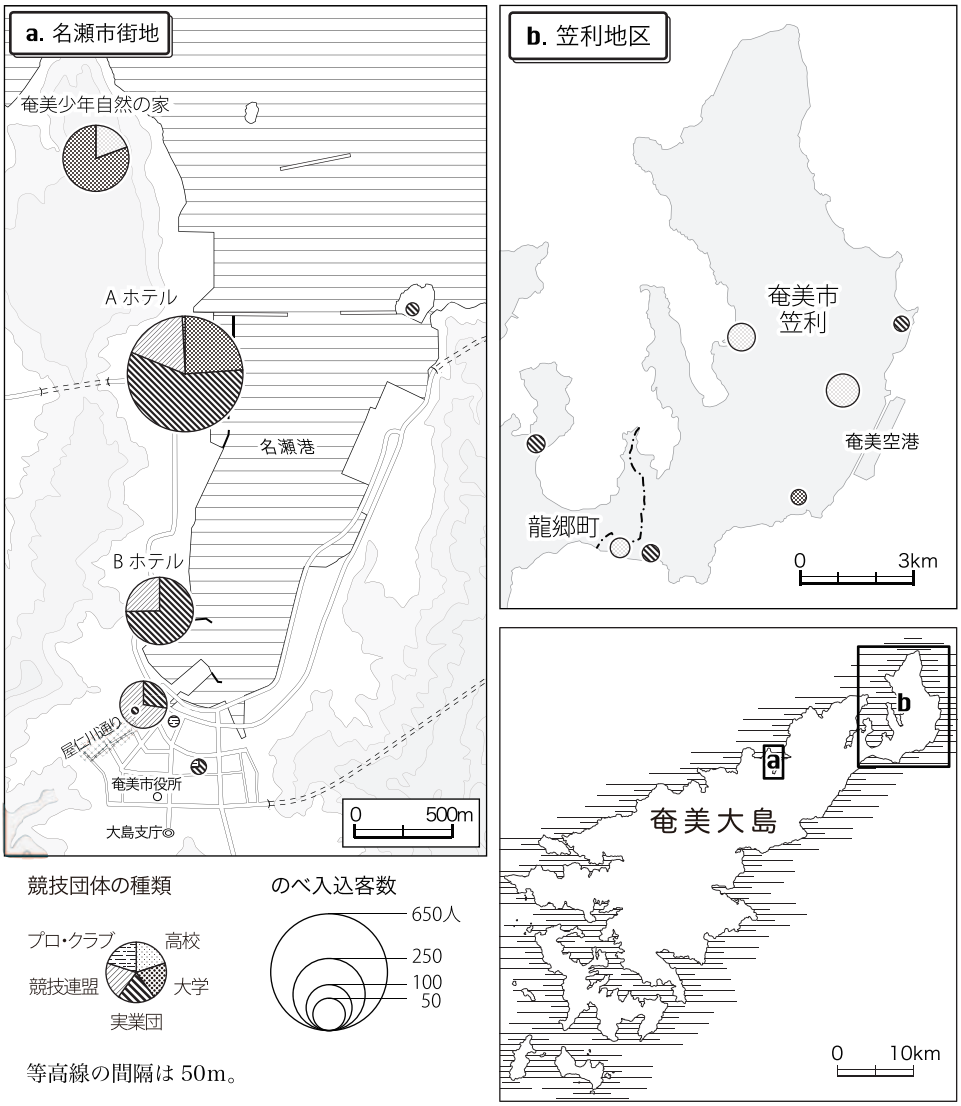


図 6　スポーツ合宿団体を受け入れた宿泊施設の分布（2007 年 4 月～ 2008 年 4 月）
（奄美スポーツアイランド協会資料より作成）

2007，2008 年に奄美大島で合宿を実施した。この当時は空前のウォン高で，韓国のスポーツチームはプロ・アマを問わず海外での合宿・キャンプを実施した。韓国の実業団㉑は，奄美大島で毎年合宿を実施している実業団⑨と 2006 年に交流協定を締結している。

Ⅳ　スポーツ合宿の基盤

以上の分析から，奄美大島にはスポーツ合宿が定着しつつあると見て取れる。本章ではスポーツ合宿が定着した諸条件を，宿泊施設，競技施設，都市的基盤，人的基盤の 4 点から検討したい。

1. 宿泊施設の集積

奄美市内には52の宿泊施設があり，計4,312人の収容能力を有する（鹿児島県大島支庁 2009）。これらのうち収容能力が大きい大規模なホテルは名瀬市街地に集中する。名瀬市街地のホテルの多くはいわゆるビジネスホテルで，客室はシングルが中心である。これらのホテルの主な顧客は，本土から出張する県職員やビジネス客である。また，名瀬港には群島各地と沖縄・鹿児島を結ぶ船が発着するため，各島からの船客が利用するホテルもある。このように名瀬市街地のホテルはビジネスホテルが中心であるが，名瀬港北部に立地するAホテルのみは，釣宿から事業を拡大したため，例外的に観光客を主な顧客層としている。一方，島北部の奄美市笠利町には，レジャー客を対象としたリゾートホテルが立地する。これらのホテルは多人数での宿泊を前提とし，ツインまたはそれ以上の客室を主体としている。

名瀬市街地および笠利町に立地する主要なホテルは奄美スポーツアイランド協会に加入し，スポーツ合宿を受け入れる。図6には，スポーツ合宿を受け入れた宿泊施設の分布を示した。受け入れ宿泊施設の分布は，奄美市内のホテルの分布に対応し，名瀬市街地と奄美市笠利町に二分される。

スポーツ合宿の誘致当初は，図6-aの北端部に位置する奄美少年自然の家を宿泊場所として指定していた。奄美少年自然の家は鹿児島県の施設で，食事の内容や門限など，成人のスポーツ合宿団体を受け入れるには制約があった。そのため1990年代の早い時期から，民間のホテルがスポーツ合宿の受け入れに積極的に参加した。2007年度において少年自然の家を利用した7組の合宿団体は，すべて高等学校と大学のチームであった。

2007年度において，スポーツ合宿を最も多く受け入れた施設は名瀬長浜町のAホテル，次に名瀬塩浜町のBホテルであった。Aホテルは54組，636人を，Bホテルは14組，213人を受け入れ，この2つのホテルだけで入り込み人数の63.2％を占めた。Aホテルの経営者は東京の私立大学で柔道部に所属していたため，当初からスポーツ合宿の誘致に積極的であった。現在は奄美市の市議会議員を務め，誘致活動の先頭に立っている。

スポーツ合宿の練習拠点となる名瀬総合運動公園は，Aホテルから約2km西に位置する。長距離種目の選手にとって運動公園までの距離はウオーミングアップにちょうどよい。運動公園までの送迎は要望があれば行うが，跳躍・投擲競技の選手以外は送迎不要であるという。この事情はBホテルでも同様で，練習拠点まで適度な距離があることが，これらのホテルが宿泊場所に利用される要素であると考えられる。

また，これらのホテルは名瀬市街地中心部からやや外れて立地しているため，ビジネス客を確保する上では市街地中心部のホテルと比べて不利であった。一方で，Aホテルは工事関係者や皇族来訪時の警備に当たる警察官の宿泊を引き受け，団体客を受け入れる経験が豊富であった。Bホテルも群島各地から高校総体などで来訪する学生団体の受

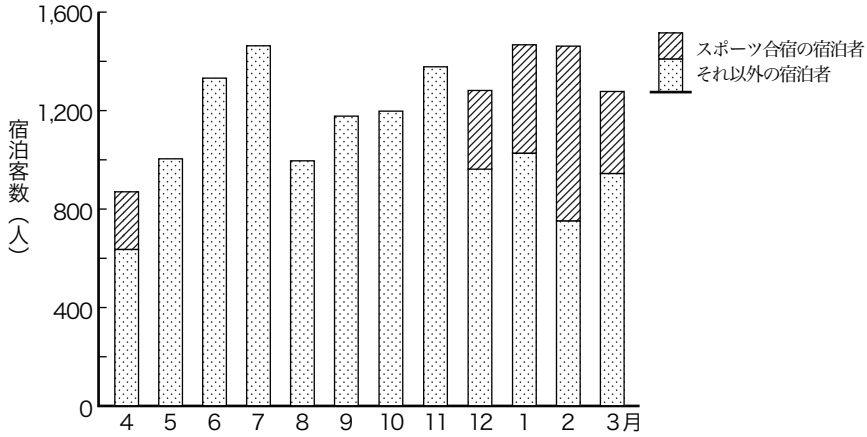


図 7　B ホテルにおける月別入り込み客数（2001 年度）
（波田野ほか (2004) より作成）

け入れに実績があった。そのため，両ホテルにとってスポーツ合宿は，既存の経営資源を活用して安定的な宿泊を獲得できる新たな団体客であった。実業団の合宿の場合，1 泊 3 食付きで 8,800 ～ 9,000 円が標準的な料金である。

波田野ほか（2004）によると，B ホテルは冬季の宿泊客の減少をスポーツ合宿によって補填することに成功している。同ホテルの宿泊のピークは 6 ～ 7 月で，12 ～ 4 月は閑散期であった。しかし，スポーツ合宿を受け入れたことにより 1 ～ 2 月の宿泊客数は 6 ～ 7 月に並ぶ水準にまで増加した（図 7）。とくに 2 月は，宿泊客の半数近くをスポーツ合宿が占めた。

スポーツ合宿で奄美大島に来る選手たちは，一般の観光客やビジネス客とは異なる性格を有する。食事についてはすべての受け入れホテルが工夫を凝らす。A ホテルでは一般客よりもボリュームを増やすことはもちろん，男女でメニューを変えることもあるという。とくに女子選手には糖分を控え，豆類やタンパク質を増やした食事を提供するという。また，デザートやサラダを豊富にし，フレッシュジュースを用意するなど，長期滞在でも飽きないメニュー作りを心がけている。波田野ほかによれば，あるホテルのスポーツ合宿向けの献立は朝食でも 4 ～ 8 品も並び, むしろ昼食が 2 ～ 5 品と軽めである。品数を増やすのは，栄養のバランスに対する配慮であるとともに，食事内容を豪華にして選手らに好印象を与えようとするものであろう。また，鶏飯をはじめとする郷土料理をメニューに織り込み，奄美の郷土性をアピールしている。

さらに，スポーツ合宿が一般客と最も異なる点は，毎日大量の洗濯物が発生することである。奄美大島のホテルでは，ランドリーサービスでこれらの洗濯物を処理することはない。代わりにコイン式の洗濯機と乾燥機を設置し，選手らに自由に使わせている。食事のあとは多くの場合自由行動だが，洗濯機の前に行列ができることもある。A ホテルは工事関係者を受け入れていた当時から洗濯機を設置していたが，他のホテルもス

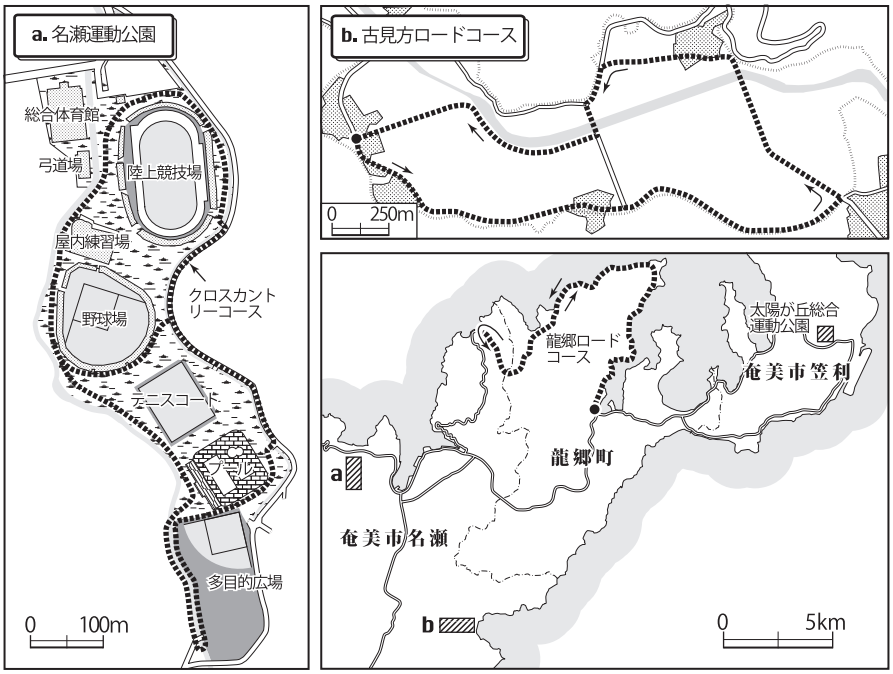


図 8　奄美大島における競技施設とロードコース（2009 年）
（奄美スポーツアイランド協会資料および現地調査より作成）

ポーツ合宿を受け入れるにあたってコインランドリーを備えた。

選手や監督から要望があれば，休養日に島内観光の手配をホテルが担うことはある。しかし，陸上長距離チームは概して禁欲的で練習本位であるという。それでもホテル内で快適に過ごしてもらうため，きめの細かい家族的な対応を心がけている[6)]。

合宿に参加する選手は決して VIP ではないが，ホテル側はマスコミや一般宿泊客からの視線をある程度意識せざるを得ない。選手からの要望があれば，食事の場所を一般客と別にしたりすることはある。しかし，奄美大島まで選手をめがけてくる取材やファンは少なく，対応は選手やチームに任せておける範囲に収まっている。合宿地として知られる沖縄や，あるいはプロ野球キャンプ地の宮崎とは異なり，奄美大島では他者の目を気にせず練習に集中できる。

一方，トップアスリートの宿泊は，ホテルにとって格好の宣伝材料でもある。スポーツ合宿を受け入れたホテルのロビーには選手らの写真やユニフォームなどが華やかに飾られている。また A ホテルのホームページやパンフレットでは，オリンピック選手が宿泊したこと，彼らと同じメニューの食事が味わえること，などを訴えかけている。

2. 競技施設の整備と行政の支援

奄美大島における練習拠点は，奄美市名瀬の名瀬運動公園と，奄美市笠利の太陽が丘総合運動公園である（図 8）。名瀬運動公園は 1993 年の県民体育大会を契機に整備が進み，

写真 1　龍郷ロードコース（2009 年）

陸上競技場の全天候型化，プールの温水化，テニスコートの全天候型化などが進められた。また，屋内練習場にはウエイトトレーニング施設が設置されている。さらに，長距離種目やマラソンの練習に対応するため，運動公園の外周に延長 1km と 2km の芝のクロスカントリーコースが整備された。2005 年には名瀬運動公園陸上競技場が，日本オリンピック委員会から北京オリンピック陸上競技強化センターに認定された。太陽が丘総合運動公園は合併前の旧笠利町が整備した。同公園には相撲をはじめとする武道の競技施設が充実している。また，同一敷地内にある農村環境改善センターは合宿団体の宿泊施設として利用可能である。名瀬運動公園を拠点とするチームは名瀬市街地に，太陽が丘総合運動公園を拠点とするチームは笠利町内のリゾートホテルや民宿，農村環境改善センターに宿泊する。

奄美大島には，フルマラソンコースと 1 周 5.25km のロードコースが設置されている（図 8）。フルマラソンコースは龍郷町浦を起点とし，奄美市名瀬芦花部（あしけぶ）を折り返し点とする往復コースで，龍郷ロードコースと呼ばれる（写真 1）。龍郷ロードコースは 2003 年に日本陸連の公認マラソンコースに認定された。一方，奄美市名瀬西仲勝（にしなかがち）の古見方（こみほう）ロードコースは，低平な沖積平野を通る農道を整備したものである。沿道には距離表示板やロードコースであることを周知する看板が設置されている。名瀬市街地からそれぞれのスタート地点までは，自動車で 15 ～ 20 分程度の距離である。

ロードコースの条件は，アスファルト舗装されていること，信号機がないこと，そして自動車交通量が少ないことである。奄美大島の道路はこれらの条件を十分に満たしている[7]。古見方ロードコースを設定する際には，風が弱く走りやすい場所であることがとくに重視された。スポーツ合宿が集中する冬季は，奄美大島でも北西季節風が吹きつける。しかし，古見方ロードコースが位置する伊津部勝は奄美大島の脊梁をなす山地の南側に当たるため，冬の季節風はさえぎられる。古見方ロードコースは，エスビー食品

の監督だった瀬古利彦氏から走りやすいコースとして高い評価を得た。競技施設やロードコースの整備は，奄美市が主体となって行った。

スポーツ合宿における行政の役割は，施設整備にとどまらず合宿の誘致活動においても重要である。スポーツ合宿の誘致活動は奄美スポーツアイランド協会が担当しているが，実質的な窓口は事務局である奄美市紬観光課である。

奄美スポーツアイランド協会では実業団の全国大会に会員を派遣し，合宿誘致のキャンペーンを実施している。具体的には競技場やレセプション会場にブースを設け，パンフレットを配布したり，すでに顔見知りとなった監督や選手らに声をかける。競技場のスタンドには，奄美の文字が入った横断幕を掲げて選手を激励する。また2008年度以降，大学チームの合宿が減少傾向にあることから，2009年度はインカレでも誘致活動を行うことを計画している。

誘致のためにはダイレクトメールも効果的で，2007年度は韓国の13団体を含む122団体に発送した。そのほか，各チームが合宿を継続的に行ってくれるよう，暑中見舞や年賀状の発送に加えて，大会優勝者には祝電を必ず打つなどのきめ細かな配慮を欠かさない。合宿団体を迎え入れるに際しても，協会会員らはロードコース脇の樹木の伐採や下草刈りを10月下旬に行う。また，奄美空港への送迎は，受入宿泊施設と連携しながら紬観光課の職員が行う。このために旧名瀬市は新たなバスを購入した。紬観光課の職員には，このバスを運転するために異動してから大型免許を取得した者が多い。

3. 名瀬の都市的インフラストラクチュア

合宿チームは競技の練習に専念するために奄美大島を訪れる。しかしただ練習環境が整備されていれば，合宿地としての条件が整うわけではない。長い場合は1カ月近くにもなる合宿期間中，普段と同様の生活を営むための施設やサービスも求められる。例えば，日用品が手軽に購入できるスーパーやコンビニ，気の利いた食事ができるレストラン，ビデオやDVDのレンタルショップなど，普段の生活空間で享受してきたものが合宿中にも求められる。合宿は生活の拠点から離れた場所で営まれる非日常的行為であるが，日常の生活習慣やリズムは維持される。すなわち，合宿は非日常と日常が接合する時空間である。

奄美大島は名瀬運動公園をはじめとして，競技に関係する施設がコンパクトにまとまり，移動にかかる時間が少ない。また，練習拠点が実質的に1か所であるため，他のチームと一緒に練習する機会が必然的に増える。その結果，競技に関するさまざまな情報がチーム間で濃密に交換される。

選手らを間接的に支援するリハビリ施設やスポーツマッサージの技能者，スポーツ医学の知識を持つ医師が存在することも，合宿中のけがや故障などのリスクを軽減することにつながる。競技にかかわる施設の水準は，合宿団体が普段練習拠点とする場所と同

等かそれ以上であることが望ましい。すなわち，練習は日常性の中で継続される。2006年に奄美市名瀬小宿の大浜海浜公園に開設されたタラソテラピー施設「奄美の竜宮」は，選手の疲労回復に有効なマッサージなどの施設が整備されている。また，名瀬市街地には大規模な総合病院が3カ所ある。

陸上競技の場合，合宿中の選手は禁欲的で節制に努めるが，監督・コーチはむしろ享楽的で陽気である。名瀬には屋仁川（やにがわ）通りと呼ばれる歓楽街がある（図6）。夕食のあと，監督らは1人で，または仲のよい監督などとともに屋仁川通りに繰り出すことが多い。本土ではそれぞれ個別に練習するため，監督・コーチが情報交換する機会は少ない。しかし，奄美大島では，多くの情報を屋仁川通りでの「息抜き」とともに得ることができる。さらに，合宿の最終日に設けられる打ち上げの場所を確保することも，名瀬ではきわめて容易である。

何人かの監督からは，屋仁川通りの飲食店で心ゆくまで飲めることが，奄美大島での合宿における大きな楽しみであるとの話を聞いた。また奄美大島で長期間の合宿を行うある監督は，瀬古利彦氏がエスビー食品の選手を率いて奄美大島で合宿することを聞き，自らも奄美大島を合宿地として選んだという。奄美大島では，東京にいては聞けないさまざまな話を，先輩監督らから聞くことができ，それが監督としての自分の基盤となっているという。人的なネットワークは，陸上競技の世界においても重要である。歓楽街の存在はこのようなネットワークの充実・拡大に寄与している。

競技施設，医療施設，さらには歓楽街の存在，加えてビジネスホテルを中心とする宿泊施設の集積は，すべて名瀬の都市的インフラストラクチュアである。名瀬は人口4万人に満たない地方小都市であるが，奄美群島の中心として，人口規模以上の集積が認められる。このような集積を活用することで，長期間にわたる合宿が円滑に実施できる。合宿で訪れる選手・監督にとって，名瀬は日常と非日常が微妙なバランスをもって接合される空間である。そのなかで選手の強化が図られるだけではなく，監督らの人的ネットワークが涵養される。これらは競技成果にフィードバックされる。

4. 受け入れのホスピタリティ

奄美大島におけるスポーツ合宿は，ある1人の人物の個性によって維持されている面が強い。その人物，C氏は，奄美市の委託職員で名瀬運動公園陸上競技場の管理人である[8)]。C氏は62歳で，大島紬の締め工程に従事するかたわら野球の指導員を長らく務めていた。現在は市内の観光施設を管理する第三セクター「道の島公社」の職員だが，合宿シーズンである11～4月は，奄美市から競技場の管理を委託される。

C氏は選手らに何くれとなく声をかけたり，話を聞いたりする。監督らもC氏を誘って屋仁川通りで酒食をともにする。練習が休みの日には，選手らを案内して島内の観光施設を回る。その結果，選手やチームから，出場する大会や祝勝会に招待されたり，電

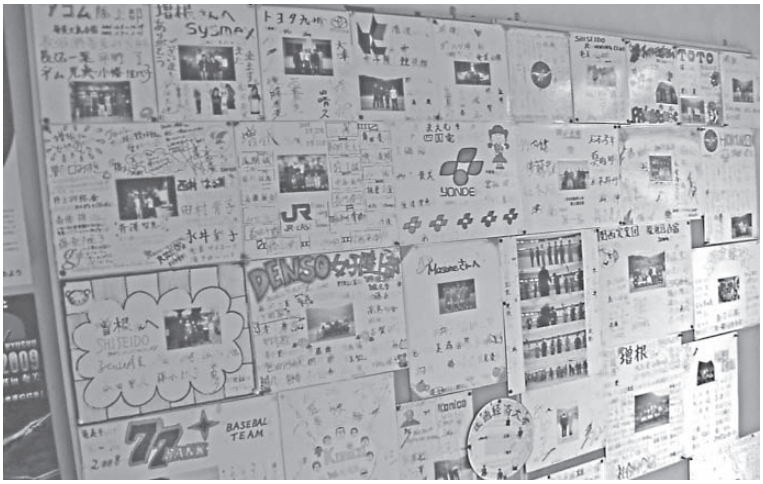


写真 2　選手から C 氏に贈られた色紙（2009 年）

話で相談が来ることもしばしばあるという。なかには奄美の合宿の目的は C 氏に会いに来ることであるという選手もいる。合宿団体が来ているとき，陸上競技場の C 氏のまわりにはいつも和やかな輪ができている。C 氏自身は，競技を離れた部分での交流を重視している(写真 2)。C 氏の携帯電話には選手らの電話番号がたくさんメモリーされ，奄美大島から帰ったあとも電話で頻繁に連絡を取り合う。C 氏と合宿を通じて知り合い，現役を引退して指導者となった選手が，チームを率いて奄美大島に合宿に来る例もある。いわば合宿が合宿を再生産する循環ができあがりつつあるといえる。そのサイクルの中では，C 氏に見られるようなホスピタリティが不可欠である。

奄美大島では地縁や血縁，学校や職場を紐帯とした人的なネットワークが重視される。したがって個人的な接触を重視する C 氏の行動は，奄美大島では常識的な範疇に属する。しかし個人的な交流や相互の理解を強く求めていた本土の陸上選手らにとって，職務の範囲を逸脱して寄り添ってくれる C 氏の存在はきわめて新鮮なものに映ったことであろう。このようなキーパーソンの存在が，スポーツ合宿の継続に重要な役割を果たしている。

このようなホスピタリティは C 氏のみに見られるものではない。人的ネットワークを重視する奄美では，他者に対するさまざまな配慮が，生活のあらゆる場面においてなされる。それと同様の行動が，合宿で来訪した選手らに対してもなされる。例えば野口みずき選手が所属するチームが年越しの合宿を実施するときには，スポーツアイランド協会が中心となって年末に餅つき大会を企画した。これは現在では恒例の行事となりつつあるが，最初はスポーツアイランド協会会員の個人的なアイディアから始まったようである。これも，正月を知人のいない南の離島で過ごす選手たちの心理を思いやった結果であるといえよう。スポーツ合宿に携わる市職員や受入施設の従業員は，多かれ少なかれ，選手・監督らとの個人的な接触を有する。職務を超えた個人としての対応が，選手らに「奄美で大事にしてもらった」という意識を生む。

V　おわりに

奄美大島にスポーツ合宿が定着する前提には，冬季の温暖な気候条件と，本土大都市からの直行便の就航がある。数人の監督から，奄美大島は沖縄ほど本土との温度差が大きくないため，調整がしやすいという意見を聞いた。また，東京発便は午前中に奄美に到着するため，時間が有効に利用できる。

これらの自然的・位置的条件に加えて，奄美大島特有の地域的条件が指摘できる。

第1に，合宿団体を受け入れる宿泊施設が整備されていることである。名瀬市街地には従来から出張客を対象としたビジネスホテルが集積し，笠利町でもリゾートホテルの立地が進んでいた。スポーツ合宿は，入り込みが減少する冬季におけるこれらのホテルの稼働率を上昇させた。また，スポーツ合宿の誘致に積極的なホテルは，工事関係者などの長期滞在客を受け入れた実績があった。

第2に，競技施設の整備・充実があげられる。奄美大島の場合，名瀬運動公園と太陽が丘総合運動公園があり，さらにフルマラソンに対応したロードコースが設けられた。また，合宿団体の要望に応えてクロスカントリーコースも新設された。しかし競技施設の充実は，一方で特定の競技種目への特化を意味する。奄美大島の場合は，それが陸上競技，なかでも長距離種目であった。

第3に，都市的インフラストラクチュアの集積が重要である。スポーツ合宿は平均9泊の長期滞在型ツーリズムである。したがって，単に競技施設が整備されているだけではなく，滞在中の「生活」が円滑になされるための設備が必要である。しかもそれらが，本土での日常とまったく同じものではなく，異境に身を置くことを意識させる非日常性をともなうことが重要であろう。屋仁川通りに代表される歓楽街の存在は，とくに監督・コーチらにとっての非日常的な空間である。この異空間のなかで，普段は近寄りがたい名監督とも知遇を得ることができ，本土ではできない情報交換が可能となる。名瀬は離島の小都市でありながら，中枢管理や商業・サービス機能の集積は大きい。ホテルや歓楽街をはじめとするアコモデーション，競技施設，およびリハビリ・医療施設の充実は，名瀬の都市的集積を基盤とする。

第4に，受入側のホスピタリティである。通常「やさしさ」や「もてなし」は属人的要素とされ，地域的な要因から除外される。しかし奄美大島のスポーツ合宿に関しては，この点が大きな基盤である。奄美大島での合宿を経験した選手が指導者となってふたたび奄美で合宿するといった循環は，練習環境以上に人的なつながりによってもたらされた。ホスト側に共通する「やさしさ」は，濃厚な対人関係を基盤とする奄美大島の社会ではぐくまれたものと考えられる。

これらの諸要素が複合することで，奄美大島はスポーツ，とくに陸上競技長距離種目の合宿地として定着した。スポーツ合宿は従来とは異なる形態の団体ツーリズムであり，

特定の目的と対象に特化した点が大きな特徴である。奄美大島のもつ地域的諸条件が，「実業団・大学を中心とする陸上競技長距離種目」という限定的需要に対応し得たことが，定着の最大の要因である。しかしこの限定的需要は，オリンピックや駅伝という国民的関心を喚起する広大な市場を背景としている。

スポーツ合宿の受け入れ体制の組織化は，旧名瀬市を中心とした行政が主導した。スポーツ合宿の受け入れ主体は奄美スポーツアイランド協会であるが，この団体を組織したのは旧名瀬市であった。そして，本土における誘致キャンペーンにも市職員が出張する。スポーツ合宿に限らず，島内のさまざまなイベントにおいて奄美市が果たす役割は大きい。むしろ行政が積極的に関与することで，民間セクターが諸事業に安心して参加する，いわば官主導の風潮が奄美にはある。

スポーツアイランド事業の本来の目的には，スポーツを通じた選手と地域との交流・啓発もあった。これらはスポーツ合宿誘致に隠れてあまり重視されてこなかった。しかし，2007 年度は自主トレ中のプロ野球選手と女子柔道の全日本強化選手による，小中学生向け教室が合計 3 回開催された。今後，トップレベルの選手らと住民との交流活動をより盛んにする必要があろう。住民ぐるみでの受け入れが，より多くのスポーツ合宿の誘致につながると考えられる。

［謝辞］　本論を作成するに当たり，現地調査では奄美市紬観光課をはじめ多くの方々のご協力をいただいた。記して感謝したい。なお，本論は平成 20・21 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 (C)，課題番号 18520611）の一部を使用した成果である。

注

1）スポーツの地理学的研究は多くはないが，Bale（1989）は地理学的な分析視角として伝播・インパクト・立地・景観・地域形成をあげている。

2）2 人のアドバイザーのうち A 氏は東京直行便を運航していた日本エアシステム (現，日本航空) の営業担当部長で, 日本陸上選手権の 1500 mで 2 回優勝した経歴を持つ。日本エアシステムは，奄美直行便の運航会社であった。B 氏は東京都内の私立大学教員で，アドバイザー就任当時はスポーツ関連のコンサルタント会社を経営していた。

3）スポーツアイランド構想が実質的にスポーツ合宿の受け入れ事業であることを反映し，奄美スポーツアイランド協会の会則第 1 条には「この会は，奄美大島におけるスポーツ合宿の受け入れ体制の充実と対外的な誘致活動の増進に努め（後略）」と定められている。

4）マラソンの野口みずき選手は，年末年始を必ず奄美大島での合宿で過ごす。彼女は長野県の菅平や中国の昆明なども練習拠点としているが，冬季に温暖な奄美大島も

その1つである。トップクラスの選手らは，複数の拠点を組み合わせることで，最適な練習環境を作り出す。

5）下柳投手は，飼い犬とともに宿泊できる場所での自主トレを希望していたところ，奄美大島のホテルが条件に合致したという。彼は年末年始をはさむ約1ヶ月間を愛犬とともに奄美大島で過ごす。同選手は奄美大島に対する感謝の気持ちから，2007年に奄美市に対して50万円の寄付を寄せた。

6）Aホテルの社長は選手らの似顔絵を描いてプレゼントすることを常としている。選手らには「描いてもらうと記録が伸びる縁起がよい似顔絵」と好評である。社長に限らず，従業員らは選手の顔と名前を必ず覚えるよう心がけているという。

7）この背景には奄美群島振興開発特別措置法によるインフラ整備への集中投資があることはいうまでもない。奄美大島の道路は，幹線道路の国道58号をはじめとして整備が行き届いている。

8）C氏はその風貌がゲームのキャラクターに似ていることから，選手らからは「マリオさん」の愛称で親しまれている。

文献

井口　梓・小島大輔・中村裕子・星　政臣・金　玉実・渡邉敬逸・田林　明・トム　ワルデチュク 2006．九十九里浜における観光の地域的特性――白子町中里地区のテニス民宿を事例に．地域研究年報 28：127-166.

鹿児島県大島支庁『奄美群島の概況』2009.

呉羽正昭 1991．群馬県片品村におけるスキー観光地域の形成．地理学評論 64A：818-838.

白坂　蕃 1986.『スキーと山地集落』明玄書房.

新藤多恵子・内川　啓・山田　亨・呉羽正昭 2003．菅平高原における観光形態と土地利用の変容．地域調査報告 25：19-45.

橋本和也 1999.『観光人類学の戦略――文化の売り方・売られ方』世界思想社.

波田野壮太・小野雄佑・鈴木健太・高柳義人 2004．奄美大島におけるスポーツ合宿の定着とその要因．駒澤大学文学部地理学科須山研究室編『奄美大島の地域性 2――地域文化演習 C 野外調査報告』139-160.

Bale, J. 1989. *Sports Geography*. London: E. & F.N. Spon.